

宗教が環境保全に果たす役割

溝口次夫

〔抄録〕

20世紀後半の科学技術の発展は素晴らしく、私達先進国の人間はより豊かな、より快適な生活を得ることができた。さらに、最近のIT産業の高度な発達情報は的確に入手でき、より便利な生活を迎えている。しかしそのために、地域の環境汚染は言うに及ばず地球全体の自然が破壊されている。

本論文では、これまでの科学の発展が目的に向かって最も効率的なプロセスをとり、環境についてほとんど注目していなかった原因を検討し、環境を破壊しないで科学を推進するために何が必要かを考察した。本論文では21世紀以降、持続可能な社会を構築するためには、従来の自然科学のみに依存した科学技術ではなく、宗教、哲学など人文科学の教えを考慮することの必要性を述べている。まず、宗教の原点に触れ、その内、仏教とキリスト教について検討した。次いで宗教と科学の融合性を歴史的に振り返り、さらに世界8か国の学生へのアンケート調査の結果を踏まえて、21世紀以降のライフスタイルはどうあるべきかを提言した。

キーワード 仏教、キリスト教、宗教と科学、アンケート調査、ライフスタイル

まえがき

猛暑の2004年の夏は、わが国の気象観測史上数多くの記録を作っている。温室効果ガス増加による地球の温暖化の一端がいよいよ現実のものとなったように感じられる。

国連環境計画 (United Nations Environment Programme: UNEP) が最近出版した「地球環境概況2000 (Global Environmental Outlook: GEO 2000)」によると、「温室効果ガス排出増による地球温暖化の防止はおそらく手遅れだろう」と警告している。これはやはり、科学の力だけで、その対策に取り組んできたからである。環境汚染の解決に宗教の力は必要ではないと考えている人は多いと思う。確かにこれまでの環境汚染は、まず現状を把握し、その影響がどの範囲に、どの程度現われているかということを把握し、その対処、制御方法を確立することにあった。これらは全て自然科学すなわち工学、化学、物理学、生物学、医学、薬学、

農学、気象学などによって解決されてきた。さらにそれを推進するための規制が法学、政治学の社会科学によって行われてきた。

このように環境問題はこれ迄自然科学分野が中心となって、その対策に取り組んできた。しかし、地球環境問題の課題の中には、科学だけでは対処できないという知識人も多い。すなわち宗教、哲学など形而上学の観点から環境保全を考えることが不可欠であるといわれている。すなわち、これ迄の科学技術至上主義を見直す必要がある。GEO 2000 ではまた、次のように述べている。「これ迄、ほとんど認識されていなかった環境問題を財政、貿易、農業、投資、研究開発の中心に置く必要がある。」したがって、科学技術の開発も常に環境への影響を考えて行うべきである。

本論文ではまず、科学と宗教の歴史的経緯を明らかにし、次いで宗教の原点に立ち返って考え、これまでの科学の進め方の誤りを指摘し、21世紀以降、持続的な社会を構築するための宗教の必要性を述べる。なおここでは数ある宗教のうち、特に東西の代表的な宗教、キリスト教と仏教の教え、自然観、環境観について考える。

以上の考え方を現状と比較するため、世界の主な国の学生を対象としたアンケート調査を行ったので、その結果についても言及する。

最後に宗教、特に仏教の教えを入れた新しいライフスタイルを提案する。

以下に、自然保護、環境保全のために宗教、哲学がどのように役立つかを、仏教、キリスト教を中心に、これからのライフスタイルはそのためにどう変えるべきかということ进行考察する。

1. 宗教の原点

宗教は人間がどのように生きるべきか、人の倫を教えるものである。世界中には数多くの宗教があるが、その原点はいずれの宗教も人の倫を教えることにあり、原理的には同じ思想である。

生きているということを離れて人間を考えることはできない。生きていればこそ人は悲しみもすれば喜びもする。迷いもすれば悟ることもできるという豊かな人生が描きだされる。しかも、誰も幸福を願わないものはないし、悲しみを好まない。

しかしその宗教の生まれたところの歴史、文化、伝統など人間活動および気候、気象、風土などの自然の違いにより、形式上はかなり異なっているように思える。世界の3大宗教といわれるものは、キリスト教、イスラム教および仏教である。そのほかにユダヤ教、ヒンズー教、ラマ教、儒教、道教など地球上には数多くの宗教がある。

私たちが生きるためには地球と自然環境をまず考える必要がある。いずれの宗教もそれについて深い教義を持っているが、ここではキリスト教と仏教について、その自然観、環境観を比

較する。イスラム教諸国は、不幸にして今まだ争いの中にあるのでここでは割愛する。しかしイスラム教徒の神への信仰の深さをよく現している例を挙げてイスラム教徒のアラーの神への信仰の深さを見てみる。

イスラム教徒のお祈りを2例紹介する。1つは、イスラム教徒の留学生を預かった人の話によると、彼は非常に真面目に研究し、実験しているが、実験室で実験中であっても時間が来ると実験を中断してアラーの神にお祈りを捧げるということであった。もう1つは、小生が経験したことであるが、1991年3月湾岸戦争が終わった後、スイスのジュネーブで戦争によって破壊され炎上した油田の影響を調査するためにUNEPおよびWMO (World Meteorological Organization 世界気象機関)が国際会議を開催した。日本からは筆者が代表として参加した。その会議で各国代表が意見を述べたが、イランの代表は意見を述べる前まずアラーの神に「嘘は申しません」とお祈りを約10分間捧げてから話を始めた。

1.1 佛教

佛教は東アジア、東南アジアで信仰されている。これらの地域は自然に恵まれた農耕生活を中心とする豊かな地域であり、自然を愛し、自然と共に人があるという共生(ともいき)思想が教えの基本である。わが国は古くから佛教国であり、自然の恵みを敬う国であった。明治維新と第2次大戦によって、それが失われ、とくに第2次大戦後は、自然環境保護に目を向けることを忘れ、貧困から立ち直るために国民の努力によって経済成長し、今日の豊かな生活を得ることができた。しかし、そのために、自然を、環境を破壊してしまった。

「南無阿弥菩提」とは仏教のお祈りの言葉であるが、この短い言葉に非常に広い、深い意味がある。

「二燈・三学・三切」が念仏のよりどころであるが、二燈は「自燈明」すなわち、自立することを指し「法燈明」は世の中のもの全て共生することを言っている。

三学は、戒学、定学、慧学を言い共生の行動のあり方を言っている。戒は社会性豊かな人となることを教え、定は共に生かされる生きること目覚めることを指し、慧は智慧と慈悲をもって共生的に行動する心が請われることを言っている。

三心は心を深めて、苦悩に満ちた現代社会を共に生きようというもので、至誠心、深心、廻回、発願心から構成されているが至誠心は自分自身の心の統一を言い、深心は他を無条件に尊重することを指し、廻回発願心は共に理解しあうことを言っている。

1989年ノーベル平和賞を受賞したチベット仏教最高指導者のダライ・ラマ14世は戦後の経済成長過程の日本を何度か訪れているが「日本の経済はいつか、もうこれ以上発展するが不可能な段階に行きつくかも知れないと思った」と語ったことがある。

今、長期の不況に悩む日本の経済はもうその段階に到達してしまったのか。日本は過去百年以上の間、西欧の物質主義的なライフスタイルを追っかけて来た。特に1945年の第2次大戦

終了後は世界で最も物質的な豊かさを誇るアメリカ合衆国を政治、経済、貿易、さらに文明までも目標にして来た。ダライ・ラマ 14 世は「工業化や近代化の価値を必ずしも否定はしないが、それは精神的価値を失わない限りということである。」と言っている。

日本はすでに物質的に十分裕福になっている。これ以上の発達を望む必要はないはずである。これは日本だけでなく先進諸国全体に言えることである。これ以上の裕福を望むことは地球の資源を枯渇することになる。ダライ・ラマ 14 世は「日本は江戸時代末期までは佛教国として自然を愛し、つつましくやかな生活をしていたはずだ」とも述べている。

次世紀もまたその次の世紀も人類の子孫が健康に、安全に地球上で生活するためにはここでライフスタイルを変える必要がある。佛教の教えに「少欲知足」という言葉がある。この教えをこれからの生活信条にすることが大切である。

ダライ・ラマ 14 世は次のようにも言っている。「日本にはもともと精神的価値を重視する伝統があった。その点から考えて、21 世紀の新しいライフスタイルを作り出す大きな可能性があると思う。」

1. 1. 1 共生思想

仏教の教えの基本である共生思想は歴史的にその意味するところはかなり変わって来ている。「還夢庵遺芳」によれば「他人の喜びを己の喜びとし、他人の悲しみもまた自分の悲しみとする、いわゆる「慈悲の心」を言っている。すなわち共は人間同土を言っている。また「共生」とは「共棲」と書いていた頃もあったようである。

「草木国土、悉皆成仏」すなわち、地球上に存在するもの全てが平等であるという教えは現在 3 つの立場がある。

1 つは椎尾弁匡の共生会運動を中心として取上げることであり、次に仏教の根本思想「縁起」を基本とするものであり、3 つ目は生態学で取りあげること考えることである。

椎尾弁匡の思想とレーチェル・カーソン（海洋生態学者、作家 アメリカ合衆国）の作品「センス・オブ・ワンダー」の言っていることは非常によく似ている。レーチェル・カーソンはクリスチャンであり、キリスト教は本来、人間が自然を支配するという考え方であるにも拘らず仏教と相通じるものがある。このあたりが宗教それぞれの変遷であろう。

- ①椎尾 弁匡の思想に基づく共生運動
- ②仏教のよりどころとなる「縁起思想」
- ③エコロジカルな観点からの共生

いずれも、人と地球上の全ての生物（無生物を含む考え方もある）は平等であるという考え方。これは、仏教の自然観「草木国土、悉皆成仏」という言葉に凝縮されている。

人が自然を支配することが神から命じられているキリスト教においても、同様の考え方もある。

っている人が多い。むしろ、ヨーロッパ諸国のクリスチャンの方がわが国をはじめとする東洋の仏教徒よりもかなり自然を大切にしていることがわかる。椎尾 弁匡の講話と、レーチェル・カーソン(アメリカ合衆国の海洋生態学者、作家)の小説の一文を以下に紹介するが、仏教徒もキリスト教徒も、その基本理念は変わらないことがよく分かる。

椎尾 弁匡は仏教講話のなかでたびたび「ともいき」について次のように話したそうである。

「人間は、肉や野菜を食べることなしには生きていられない。無機物のミネラルがなくて生きていけない。それどころか腸にさまざまなほかの生命(菌)がいてくれるおかげで人間は生きることができる。人間は他の生命、自然によって生かされているのです。そして人間は死んで灰になり、土に帰ることによって植物や動物ほかの生命に食べられている。この生かし生かされる関係が「共生(ともいき)」であり、仏教の根本思想はこの共生にある」

①の共生思想は、過去には人と人との共生を言っていた時もあったが、現在は③のエコロジカルな観点からの共生と共通している部分が多く、地球上での生物循環を言っている。この教えは仏教だけでなく他の宗教にも相通じるもので、アメリカ合衆国のレーチェル・カーソンは彼女の作品「センス・オブ・ワンダー」の中で次のように書いている。

東アフリカの山麓にある川の話である。

「休火山の溶岩帯を通ってくる水が集まったこの川は、それこそ澄みきった、驚くほど清らかな川であった。

この川にはかなりたくさんのカバがいて、昼はひんやりした水に体を沈めて休んでいる。

夜になるとカバたちは陸上に上がり、草を食う。そして翌朝、また川に戻ってくる。やがてカバたちは川の中で大量の糞をする。澄みきった水には一瞬にして糞が広がり、それこそ1メートル先も見えなくなる。ついさっきまでの清流もどこへやら、水は糞の中の草のかけらでいっぱいになってしまう。

するとたちまち、どこからともなく大小の魚たちが大量に現われ、水中の草のかけらを食をはじめめるのだ。あっという間にカバの糞は食べつくされ、川はもとの清流に戻る。そして満腹した魚たちは、川のあちこちへ散らばってゆく。

ぼくは吸いこまれるようにこの映画をみつめていた。川というのはこういうものか。カバが陸上へ出て草を食い、自らを養いながら、魚たちを養う。おそらくは鳥たちは魚を捕えて、自らを養いながら、陸上で糞をして草を養うのであろう。」

もう1つ、エコロジカルな観点からの共生のあり方を紹介する。

子供の頃、田舎の菩提寺で次のような話を聞いたのを今でも憶えている。その頃、筆者の村では毎週土曜日の夜、菩提寺に集まって住職のお説教を聞くのが常であった。キリスト教徒が教会で日曜日の朝の礼拝に出かけるのと同様である。お説教は子供の頃（小学生1、2年の頃）のことであり、随分年月も経っているし、夜のお説教なので半分以上は眠っていたので記憶はないが、次の話だけは今でもはっきりと覚えている。

「何時の頃のことかは時代は良く覚えていないが、あるお坊さんが旅をした。旅先の旅籠で夜中、虱にかまれて寝れなかったその坊さんは、虱を殺すのではなく、旅籠の部屋の柱の中にあった穴に入れて翌朝旅立った。その坊さんは翌年の旅の帰りの帰途、同じ旅館へ泊まった。同じ部屋へ通されたので、坊さんは虱を入れた穴を思い出し、穴を見ると虱がやせ細って生きていた。そこで坊さんは自分の血を思いっきり虱に吸わせた。そのために、坊さんは高熱を出した。」という話であった。

②の縁起思想は仏教の根本思想であり、自然界にあるもの全ての原因（因）と条件（縁）について示したもので、共生の思想はここから生まれているとも言われている。

1.2 キリスト教

西洋文明の自然科学の歴史はBC7世紀頃、ギリシアの自然哲学に始まったと言われている。キリスト教はそのような文化圏に生まれているところから、他の宗教と比べて極めて理論的である。ヨーロッパの近代文明を支えてきたキリスト教は「自然は人間の支配の対象であり、人間だけが生きる権利がある」とする世界観が、生態系破壊の歴史的な原因となったとして厳しく非難されている。しかし、キリスト教に限らずその教えは象徴的、多義的な部分が多く、各時代において真剣な解釈論議があるのが普通であった。したがって、キリスト教の「自然は人間の支配の対象」とする見解も絶対的ではない。全米キリスト教協議会の神学者を中心にスチュワード・シップという考え方が生まれている。これは神様が自然を人間に預けたのは何も人間の思うままに支配させるためではなく、自然を保護し、管理するためであるという考え方である。キリスト教はその教えるところは同じであるが、ローマカトリックとプロテスタントの違いなどアメリカ合衆国、カナダの北米大陸とヨーロッパ諸国では個人の生活行動、考えがかなり異なっている。もともと、アメリカ大陸のキリスト教徒はヨーロッパ本来のキリスト教の教えを是とせず、新しい大陸で育ったものである。そのためではないと思われるが、アメリカ合衆国はその後ヨーロッパ大陸諸国に比べて、資源豊富な大陸であり、アメリカ合衆国とカナダだけであることも幸いして安い資源を有効に利用し、今日世界に誇る裕福な生活レベルの高い社会を構築している。一方、ヨーロッパ諸国はそれほど広くない大陸の中に数多くの国があり、全体を平均的に見れば必ずしも資源に恵まれているとは言えない。そういう背景

もあって、古くから節約を尊び贅沢を慎むという風潮があった。

西洋文明はキリスト教を背景に自然科学の発展を成し遂げ、今日、キリスト教国家が世界を支配することになった。しかし、ヨーロッパの古い戒律のローマンカトリックに飽きたらず、アメリカ大陸へ渡った人達はいわゆるプロテスタントと言われるキリスト教徒とヨーロッパのクリスチャンとはその生き方、考え方かなりの違いがある。これは、ヨーロッパ大陸と北米大陸の国土の違い、資源、エネルギーの違い、天災等気象条件の違いが大きく関与している部分がある。すなわち、北米大陸の人達は広大な土地、豊かな資源、エネルギーを背景に、より豊かな生活を基に政治、経済、貿易、科学技術の発達等すべての面でもヨーロッパを凌駕した。一方、ヨーロッパ諸国は個人の豊かさに限度をもうけ、自然の恵みに感謝し、これからの子孫が安心して地球上で住める環境を構築するために、コントロールしている。キリスト教は西洋文明の歴史、伝統と共に成長している。

ヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国は言うに及ばず、わが国も含めて世界中のキリスト教信者は家庭内にキリスト教の神を敬う精神が入り込んでおり、生まれたときからキリスト教を信仰し、日曜日の礼拝には必ず出かける。また、何か良いことに恵まれるとキリストの神のご加護であると感謝することを忘れない。

1.2.1 エコロジーと地球環境

神話や聖書物語は象徴的、多義的なものであり、それぞれの時代で真剣にその解釈について論議がある。したがって、キリスト教の「自然は人間の支配の対象」とする考え方も必ずしも絶対的ではない。

全米キリスト教協議会の神学者を中心に生まれたスチュワード・シップは仏教の共生思想と同様の考え方であると理解できる。

「キリスト教の神は、人間とは掛け離れた絶対的なところと考えられがちだが、実は人間、動物、植物の心にも身近にある」という考え方があり、聖フランチェスコなど修道者たちは自然の中の素朴な生活を大切に生きてきたと言われている。

仏教は本来、人間と万物が仏性を共有することを教えの基本としているが、禅の修業中「自然と我は唯一である」と悟ることもあるようだ。

人類が健全にこの地球上に生き続けるためには、地球の生態系の保全が不可欠である。そこで、エコロジーの領域を研究する人たちが増えている。

環境を保全するために、次の2つの課題がある。まず1つは、地球温暖化問題、エネルギー資源問題などの環境問題を具体的、実践的なレベルで解決することである。すなわち、温暖化の原因である温室効果ガスをどのようにして削減するか、乏しくなっていくエネルギー資源の代替エネルギーをどうして確保するかということで、社会、経済、産業、科学技術など様々な形而下学分野で展開されている。もう1つは、エコロジー問題をもっと人間の精神的、内面的なレベルで考えることである。デンマークの哲学者アルネ・ネスは前者を **Shallow Ecol-**

宗教が環境保全に果たす役割（溝口次夫）

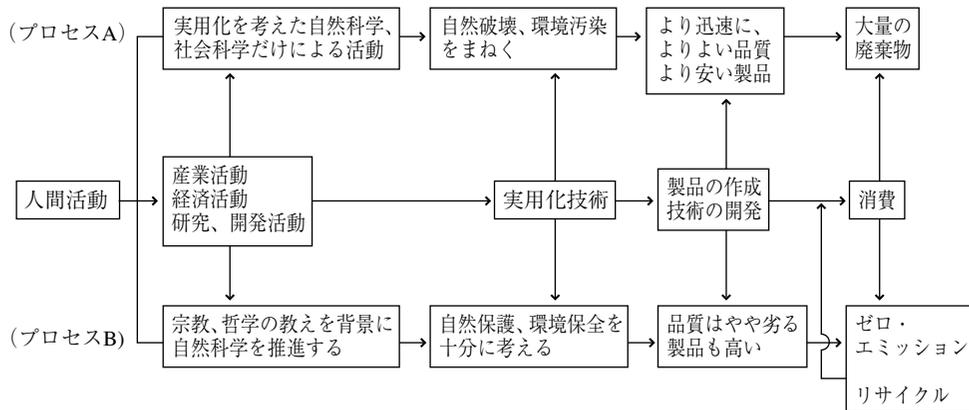


図-1 人間活動のあり方（A：従来のプロセス B：将来のプロセス）

ogy, 後者を **Deep Ecology** と名付け、「選択と競争の原理に基づく発想，社会，経済システムはこれ迄の主流であるが，科学技術の発展も含めてこの延長線上では，地球環境問題に対処しきれないのではないか。そこで人間を含めた全ての生命体について，自分が生き，他の生物も生かす共生の思想を価値あるものと評価する精神的エコロジーすなわち，ディープエコロジーが必要である」と提唱している。これは決してシャローエコロジーを否定するものではなく，シャローエコロジーとディープエコロジーが相俟って 21 世紀以降の環境に対処すべきであるとしている。ここで宗教が自然，環境保全への役割が大切であるということが理解できる。図-1 に人間活動が両エコロジーの考え方の中でどのように関連しているかを示す。

1. 2. 2 ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国のキリスト教文化

アメリカ合衆国は建国 200 年余であり，文化的遺産と言うものはほとんどない。したがって，ヨーロッパに対する羨望が非常に大きい。

そのために他の面でヨーロッパを凌駕しようとしたように思える。アメリカ経済の飛躍的な発展，科学の進歩はもちろん，財力，資源の裏付けがある訳であるが，ヨーロッパより秀れたものを求めたことも理由の 1 つである。

ローマンカソリックとプロテスタントの違いはもちろんあるが，同じキリスト教を信仰しているにも拘らず，ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国の経済観，自然観は大きく異なる。これは国土の大きさ，資源，エネルギーの量などに大きく左右されているものと考えられる。例えば，日本人の戦後の多くの人達の夢は自家用車を持ち，一戸建の家に住むことであった。今は多くの部分でその夢は満たされた。それはアメリカ合衆国を見習い，手本としたからである。しかし，日本には資源，エネルギーはアメリカ合衆国は言うに及ばず，ヨーロッパ諸国よりも少ない。したがって，アメリカ合衆国をいつまでも追従してはいけないということに気付くのが遅すぎたと言える。その間に自然を大きく破壊し，環境を悪くしてしまった。もちろん，アメリカ合衆国が，世界一多い自動車を有し広い国土を走り抜けることには意味がある。

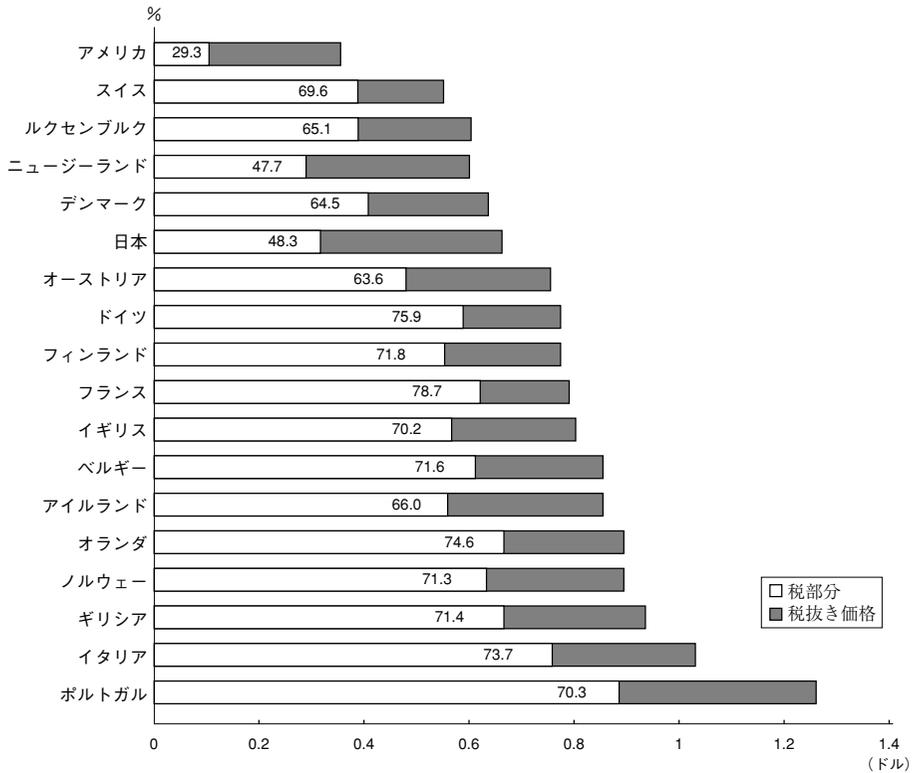


図-2 OECD 諸国における無鉛ガソリンの価格と税負担
OECD (1996) 資料から作成

石油をはじめ、資源も豊富なため世界一安いガソリン (図-2) を世界一多く使っている。これが、地球全体の温暖化に影響しているのである。

2. 科学と宗教

前述したように自然科学の歴史は B. C. 7 世紀頃、ギリシアの自然哲学がその始祖といわれている。哲学が今日の西洋文明の自然科学を生んだ訳である。西洋の文化、宗教が東洋の文化と比べて論理的であるのはそのためであろう。もちろん、科学の進歩、発展はヨーロッパ文明が古代から現代まで中心的な存在である。しかし、東洋、中国においても、BC 400 年の鑄鉄の発明、AC 100 年の紙の発明があり、10 世紀末までに版本、火薬、羅針盤、土製活字などの発明が知られている。

10 世紀頃迄も、もちろん自然科学の発達はあったが、14~16 世紀イタリアに始まったルネッサンスが西洋の自然科学を開花させ、天動説から地動説へ、地球全体を視野に入れるようになった。とはいっても、14 世紀から、まずイタリアで開花したルネッサンスは芸術の革新で

あったが、その頃の美術品、工芸品はいずれも宗教の色濃く、中世の終りまでは宗教の中の芸術であり、科学であった。その典型的な例がルーブル美術館に収められている「モナリザの微笑」であろう。

近代科学の始まりは何時かということを確認することは難しいが、ケプラーとガリレオが精密な測定を行って、宇宙を描き始めた 1600 年頃であるというのが多くの科学者の意見である。ヨーロッパの近代科学は当初から既成の宗教と激しく対立していた。もちろん、初期の科学者は「教会の神」をこころから信奉する信心深い人たちであった。ガリレオの裁判、この頃の正統的科学と正統的宗教は互に不信の念を抱いていたのが歴史的事実である。

今日の自然科学は 18 世紀中頃、最初にイギリスで起った産業革命が飛躍的に進める原因となっている。イギリスの産業革命に始まった今日の科学技術は、それ迄、人の力で動かしていたものを道具、動力に変え、ロンドンでは大量のこれ迄にない製品が作られた。

近代科学はまず医学の発達で始まり、腸チフス、天然痘、マラリアなどの病気の治療法、予防方法を確立し、飛行機から人工衛星に到る技術、コンピューター科学の発展など、宗教ではなし得ない理論、経験、実験に基づいて行われたものであり、神話の教条や検証不可能な宗教に依存するものではないといったことから、最近まで人間が生きるために宗教、哲学が必要でないと考えられ、科学一辺党に頼ることとなっていった。

科学は人間に真理を提供するけれども、その真理の使い方に問題があった。ここに宗教の必要性がでてくる。宗教は科学をどのように使うべきかを示唆している。

宗教の裏付けがあって始めて科学が正しく使われるのである。産業革命以降、20 世紀の終り頃までそれを考えないでただ科学の進歩、人間の役に立つ科学という立場をとって来たために、自然を破壊し、身の回りの環境を汚染し、人の生命までも奪うことになっていった。もちろん、環境汚染の中には宗教、哲学を考えず、科学の力だけで取り除けるものも多くある。

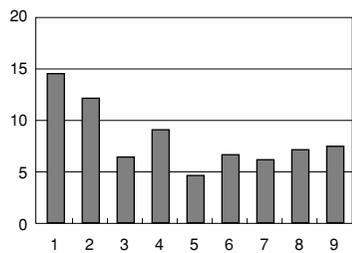
しかし、現在、最も重要である地球規模の環境問題の中には科学の力だけでは対処できないものがあると言われている。

もちろん科学の進歩は今後も重要であるが、宗教、哲学の背景のもとで発展させる必要がある。冒頭に述べた GEO 2000 でも「財政、貿易、農業、投資、研究開発を行うとき環境問題を常に考えなければならない」と警告している。

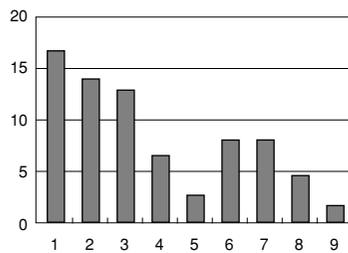
これからの科学の発展は次のような環境保全型科学技術を推進すべきである。

1. 自然を守るためのモニタリング技術
2. 自然エネルギーを利用する科学技術
3. 温室効果ガスを出さない自動車の開発
4. 省エネルギーのための科学技術の発展
5. 環境への負荷の少ない製品の開発
6. 資源循環型科学技術

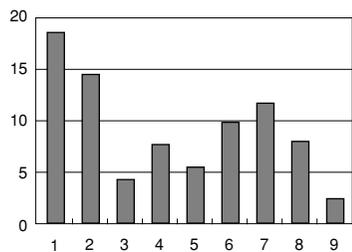
(1) 日本



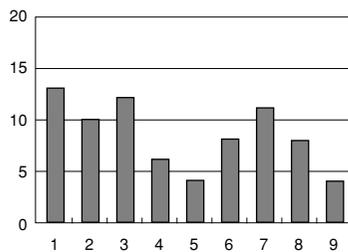
(5) ドイツ



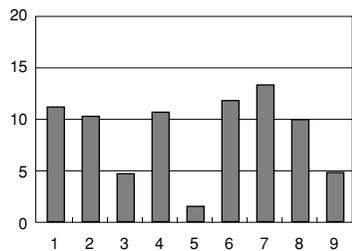
(2) 韓国



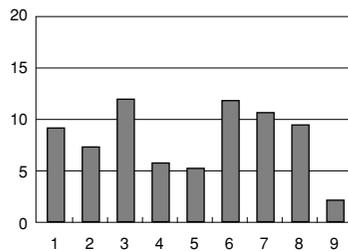
(6) スウェーデン



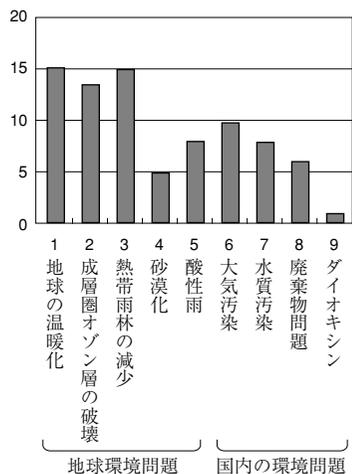
(3) 中国



(7) アメリカ



(4) イギリス



(8) トルコ

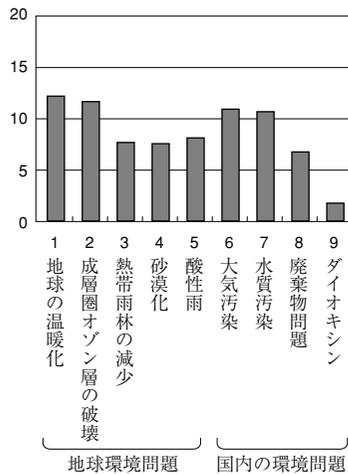


図-3 環境問題で最も重要なものは何だと思いますか

後述する世界の8か国の学生のアンケート調査結果によると持続的社会的のために必要なものという間に、中国だけが科学の発展と言っている(図-3)。他の学生が科学の発展に否定的なのは、これも世界の環境が科学によって悪くなったと考えているからで、科学が悪いのではなく、その進める方向を誤っていたと考えるべきである。

3. 各国学生の環境保護の認識

世界8か国の21世紀を担う学生の環境観を2000~2002年にかけてアンケート調査をした。調査の対象は東アジア大陸3か国(日本、韓国、中国)、ヨーロッパ3か国(ドイツ、イギリス、スウェーデン)、中東地域1か国(トルコ)および北アメリカ大陸(アメリカ合衆国)である。南半球地域の国は含まれていないが、この調査結果で、ほぼ世界の学生の大勢は判断できたと考える。アンケート調査の項目は21項目であるが、その内特に宗教と環境に関係があると考えられる項目についての結果を紹介する。図-3は現在重要と考えられている地球と地域の環境問題について、何が重要であるかとの問いに対する回答である。図-3に見られるように6か国の学生が地域の温暖化を最も重要と考えており、これは前述したように自然科学の力だけではどうにもならない。すなわち形而上学、哲学、宗教という精神的な人の心の持ち方に基づいた行動が必要であることにほかならない。中国、アメリカ合衆国の学生が地球の温暖化ではなく、大気汚染、水汚染など地域の環境を重要視している。もちろん、中国は現在経済成長の途上にあり、大気、水質の悪化が重要であるが、アメリカ合衆国が地球の環境問題をトップにもって来ていないのは疑問である。1997年に決められた京都議定書からの撤退の背景が分るように思う。次に、「宗教が環境保護に必要か」という質問に対して、日本、韓国、中国など東アジア地域すなわち佛教国といわれる国の学生は「必要である」と回答しているが、キリスト教国であるドイツ、イギリス、スウェーデンの学生からはほとんど回答が得られなかった。これはキリスト教国の国民が、常にキリストと共に存在するという考えからすれば、質問の意味がよく分からないということのようだった。ドイツ、イギリスの何人かの学生に聞いたところ、特にキリスト教、すなわち宗教を意識していないという回答であった。

最後に、宗教とは直接関わらないが「環境にやさしい商品ならば値段が高くても購入するか」という質問に対して、日本の学生が買わないという回答が最も多く、ドイツ、スウェーデンの学生は購入するという学生が多かった(図-4)。また、同じ東アジアでも韓国の学生の回答はヨーロッパの学生同様「環境にやさしい商品は高くても買う」という回答が多かった。他の項目でもキリスト教国の学生に近い回答が得られた。これは韓国で普及している儒教のためかもしれない。儒教は孔子を祖とする教学であるが、韓国ではキリスト教と同様に幼い頃から家庭で教育されており、その表れの最も分かり易い例が、目上の人を、特に老人を敬うということである。20年程前、はじめて韓国へ行きソウルの地下鉄、およびバスに乗った時驚いた

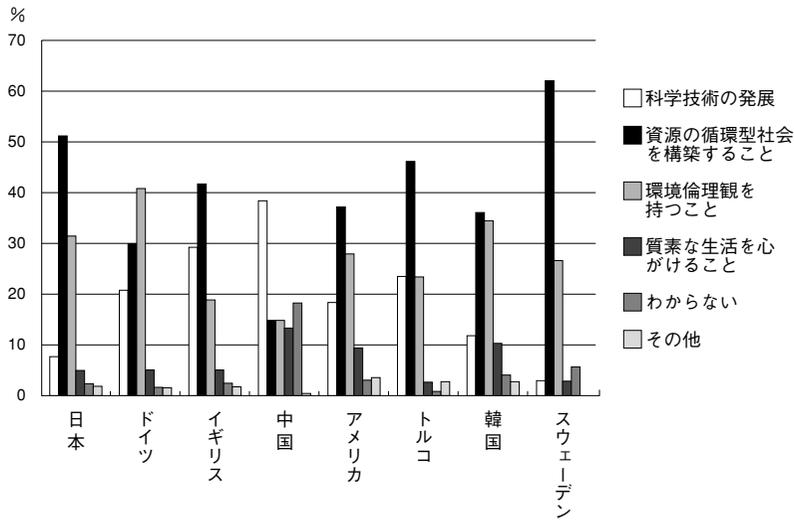


図-4 持続可能な社会のために何が必要か

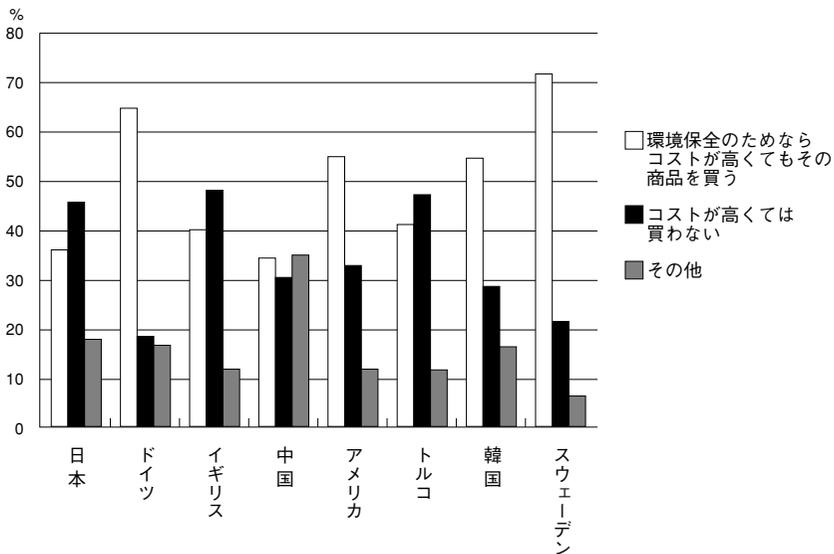


図-5 環境保全と物価

のは、車内で座っていた髪の毛を赤く染めた学生たちが、一斉に筆者に席をゆずるために立ち上ってくれたことである。儒教の国、老人を敬う国では当然のことであるが、日本ではそういう学生たちにお目にかかったことがない。佛教大学の学生も同様である。このあたりに宗教の重要性が分る気がする。決して浄土宗が悪い訳ではなく、その浸透のあり方に問題があるように思う。

「これからの環境をよくするためにはどうすればよいか」という質問に対して、中国の学生

宗教が環境保全に果たす役割（溝口次夫）

は「科学技術の更なる発展」と回答しているが、他の7カ国の学生は「科学技術ではなく、省エネルギー、リサイクルが重要である」と回答している（図-5）。さらに、ドイツの学生は「倫理観が最も重要である」と回答し、哲学、宗教を正しく学び、それに基づいた行動をすることが必要であると説明している。

いずれにしても、国情、国の経済状況などがあるが、環境保全のために宗教、哲学の力が必要であるということが読み取れる。

なお、トルコについては確かな情報を把握していないのでここでは言及していない。

4. これからのライフスタイル

前述したようにグライ・ラマ14世は最近の日本の経済発展に疑問を持っているが、21世紀はこれまでのアメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国のキリスト教諸国の主導的立場からの教えから仏教が世界の中心となる必要がある。持続的な社会とするためには、今こそ仏教の本来の教えに沿った生き方をすべきであると考ええる。

確かに、これまでの日本人の目標であった豊かな生活、便利な生活を改めることは難しいであろう。しかし、21世紀以降も地球上で全世界の人間が安らかに生きるためには、物質的な豊かさ以上に精神的な豊かさを考えなければならない。8カ国の学生のアンケート調査結果では、中国の学生以外はリサイクル社会の必要性を言っているし、ドイツの学生は倫理観の重要性を明確に挙げている。インドの父といわれるマハトマ・ガンジーは「自然は私達の要求は満たしてくれる。しかし私達の欲望は満たさない」と言っている。地球上のエネルギー資源は有限であり、発展途上国の人口増加を考えると、極めて重要なことである。「少欲知足」という仏教の言葉があるが、これはガンジーの言葉を受けてどのように生きるべきかを教えたものである。「少欲知足」を日常的な行動で例を示すと、次のようになる。やさしいことであるが、続けないと意味がない、継続して行動することが大切である。

1. 自然の恵みに感謝すること
2. 「もったいない」の心を忘れないこと
3. ゼロ・エミッションを実行する

21世紀以降はこの考え方をライフスタイルの中心に置くべきである。

〔参考書、論文〕

川田 洋『地球環境と仏教思想』第三文明社

スー・グレイグ他『環境教育入門』明石書店

水谷 幸正『仏教・共生・福祉』思文閣

溝口 次夫編著『環境学入門』環境新聞社

溝口 次夫「人間活動における環境のプライオリティー」『佛教大学社会学部論集』第34号

溝口 次夫「持続的社会構築のための環境意識とその行動に関する研究」『佛教大学総合研究』第9号
(2002年)

加藤 三郎『環境と文明の明日』プレジデント社
村上陽一郎『科学, 哲学, 信仰』レグレマ文庫 第3 文明社
丹波 元『明如上人抄』PHP 研究所
佛教大学編『法然上人の思想と生涯』東方出版
黒川 紀章『共生の思想』徳間書店
高松 平義『エコライフ』化学同人
石 弘光『環境税とは何か』岩波新書
レーチェル・カーソン『沈黙の春』新潮文庫
藤尾 正人『一世紀はドラマ』燦葉出版社
溝口 次夫『環境学入門』環境新聞社
溝口 次夫『やさしい環境講座』環境新聞社
米本 昌平「科学と宗教の共生」『季刊仏教』法蔵館
梅原 猛「梅原猛の授業」『仏教』朝日新聞社
加藤 尚武『環境と倫理』有斐閣アルマ
佐和 隆光『地球温暖化を防ぐ』岩波新書
チン・ウィルパー『科学と宗教の統合』春秋社
端山 好和『自然科学史入門』東京大学出版会

(みぞぐち つぐお 公共政策学科)
2004年10月15日受理